

別紙1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	---------

氏 名 小 橋 亮 介

論 文 題 目

ひきこもりとエフォートフル・コントロールとの関連に関する研究

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 平石賢二

名古屋大学心の発達支援研究実践センター教授 金子一史

名古屋大学学生支援センター教授 鈴木健一

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

本論文は、近年、日本において深刻な社会的問題となっている青少年や成人のひきこもりとひきこもり傾向について研究している。特に日本においては殆ど取りあげられてこなかった気質的な要因として、気質的な自己制御であるエフォートフル・コントロールに着目し、ひきこもりまたはひきこもり傾向との関連について実証的研究を行い、その結果からひきこもりの予防や早期の支援方法の提言を行うことを主な目的としている。

本論文は 5 章で構成されている。

第 1 章では、日本のひきこもりの現状、国内外におけるひきこもりに関する概念整理、研究動向のまとめなどについて述べている。文献研究の結果、海外の研究ではひきこもりの背景要因や原因に関する研究が多いのに対して、日本では支援に関する研究が重視され、特にひきこもりの気質的要因に関する研究が少ないことが明らかにされている。この点を踏まえ、本論文では気質的要因として、気質的な自己制御であるエフォートフル・コントロールに着目し、ひきこもりとの関連を検討することを目的として述べている。また、関連して論文の構成と各章の概要が示された。

第 2 章の研究 1 では、大学生 514 名を対象にした質問紙調査によって、気質的な自己制御であるエフォートフル・コントロールの 3 側面（注意の制御、行動始発の制御、行動抑制の制御）が、発達過程で後天的に獲得される社会的自己制御の 3 側面（自己主張、持続的対処・根気、感情・欲求抑制）を媒介してひきこもり傾向の 3 側面（他者からの評価への過敏さ、自己否定・不安全感、孤立傾向）に直接、間接的に影響を与えるという仮説モデルの検証を行った。男女別の多母集団同時分析を行った結果、変数間の関連には男女差が見られたが、男女共に注意の制御と感情・欲求抑制がひきこもり傾向と直接的に負の有意な関連を示していた。

第 3 章の研究 2 では研究 1 で注意の制御がひきこもり傾向と有意に関連したという結果を踏まえて、注意バイアスという概念に着目した。注意バイアスはドット・プローブ課題を用いた実験法によって測定されている。大学生 100 名に対して質問紙と実験を実施し、エフォートフル・コントロール、注意バイアス、ひきこもり傾向の 3 変数の関連を、調整媒介分析モデルによって検討した結果、男子においてのみ注意バイアスの調整効果が認められ、女子はエフォートフル・コントロールが注意バイアスを媒介してひきこもりに関連するという男女差が見られた。

第 4 章の研究 3 では、ひきこもり経験者 9 名を対象とした面接調査を行った。研究 3 では、研究 1 と研究 2 では取りあげられていない環境要因として、周囲の人とのかかわりに焦点をあて、ひきこもりまで、ひきこもり中、脱ひきこもり後という 3 つの段階におけるひきこもり経験プロセスと周囲のかかわりについて、エフォートフル・コントロ

別紙 1-2

ールの高さも考慮した仮説的概念モデルの生成が試みられた。面接によって得られたデータは、構造構成主義的質的研究法をメタ研究法とした修正版グランデッド・セオリー・アプローチによって分析された。結果として、ひきこもりまでの段階では、思春期の難しさ、家族とのかかわりの少なさ、家族に頼れない状況、学校での傷つき体験、仕事への馴染めなさがひきこもりと関連し、ひきこもり中では、家族がひきこもりを受け入れ、支援する関係性、家族以外では似た経験をした者の存在が重要であることが示された。また、エフォートフル・コントロールとの関連では、エフォートフル・コントロールが低い人はひきこもりを脱した後に再びひきこもりに陥りやすいこと、エフォートフル・コントロールの高い人は個人内要因よりも家族機能不全やいじめの経験というストレスフルな環境要因の影響が大きい可能性が示唆された。また、これらの結果を踏まえて、ひきこもりの理解においては、ストレス脆弱性モデルの枠組みが有効であることが論じられた。

最後に、第5章では総合考察として上記の研究知見を総括し、さらに得られた知見からひきこもりの予防や早期の支援についての提言を行っている。また、本論文のひきこもり研究における意義と臨床実践における意義、本論文の課題と今後の展望について考察された。

本論文の特色と学術的意義は、以下の点である。

- ①日本においては十分に実証的な研究が行われてこなかった気質的な自己制御であるエフォートフル・コントロールに着目し、ひきこもり傾向やひきこもり経験プロセスとの関連について検証したこと。
- ②質問紙調査法だけでなく、実験法や面接法といった多様な方法による検証を行っており、それぞれの方法に関して、今後のひきこもり研究の課題と発展可能性を示したこと。
- ③ひきこもり経験者に対する面接調査の結果に基づき、ひきこもりまで、ひきこもり中、脱ひきこもり後までのひきこもり経験プロセスとそれに影響を与えている家族や家族以外の他者のかかわり、エフォートフル・コントロールの高さによる違いに関する新たな仮説的概念モデルを提示しており、ひきこもりの予防や支援のあり方について有益な示唆を与えていること。

以上の論文内容に対して、審査委員からは以下のような疑問点、問題点が指摘された。

- ①海外における小児を対象にした social withdrawal の概念を日本の青年や若者のひきこもりと同じものとして扱っても良いのか。同じ用語でも現象は異なるのではないのか。
- ②一部の結果しか統計的に有意ではないのに、全体が関連しているかのような記載をしている箇所が見られる。丁寧に書き分ける必要がある。
- ③本研究の面接調査の対象になっている研究参加者は、ひきこもりの状態から脱した人たち

別紙 1 - 2

であり、ひきこもりから脱することのプロセスに焦点があたっているが、臨床的な支援の観点から言えば、ひきこもりの状態にある人は、ひきこもりの状態をいかに認めていくかが重要になる。そのような支援の方向性についてはどう考えるか。

- ④研究 3 では面接データに対して、修正版グランデッド・セオリー・アプローチによる分析を行っているが、プロセスの分析という点では、複線経路・等至性モデルなど他の質的研究法なども有効だったのではないか。

審査委員からのこれらの指摘に対し、博士学位申請者は研究の限界や課題について十分に認識しており、質疑に対する回答も的確であり妥当なものであった。また、これらの課題は今後の研究によって対処していくことが可能であると判断した。

以上の結果を総合し、審査委員は全員一致して、本論文を博士（心理学）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。